

# Shakespeare の作品におけるキリスト教の影響

～ *Hamlet* に見られる聖書の引用句を例として～

古庄 信

## Abstract

The aim of this paper is to discover Shakespeare's intention in citing the Bible in *Hamlet*. The paper relies heavily on Steven Marx's work in this field.<sup>1)</sup> If we read the drama carefully, we can easily find many expressions, such as "*man and wife is one flesh ...*" (*Ham.* 4.3.52), quoted from the Bible.

There has been much work done on the relationship between Shakespeare and the Bible, but Marx's recent analytic work<sup>2)</sup> is particularly noteworthy: he tries to associate each of Shakespeare's work with the Bible very extensively in terms of *typology* and *midrash*.<sup>3)</sup>

Following his view, we may be able to get some different answers from ever to the questions: what theme did Shakespeare take from the Bible for *Hamlet*? Or what was Shakespeare's attitude to Christianity?

キーワード: Bible, Shakespeare, *Hamlet*,

## 1. 本論の目的と研究方法

これまで *Hamlet* を個人的に鑑賞したり、また授業で学生とともに講読した際に気になった表現—すなわちキリスト教的（または聖書からの引用と思われる）表現がしばしば見られた。これらの引用表現を摘出し再分析することで、それらがこの作品の中でどのようなモチーフとして用いられているのか、ひいては作者 Shakespeare のキリスト教観がどのようなものであったか、を知る手がかりとしたい。

これまでに多くの先駆的研究がなされてきたが、その中でも注目すべきは、Steven Marx の *Shakespeare and the Bible*<sup>4)</sup> であろう。個々の引用についての解釈は様々な著述に見られるものの、ひとつの作品全体に関して聖書の引用がどのような意味をもつか

について体系的に分析したものは少ない。そのような意味で Marx の typology (予表論) と midrash (聖書注釈)<sup>5)</sup> によるテキストの読み解きは魅力的かつ示唆に富む。

Marx はその著書の中で、*The Tempest* に見る創世記、*Henry V* に見るモーセの五書、*King Lear* に見るヨブ記、*Measure for Measure* に見る福音書というように特定の四作品に各々聖書の箇所を対応させて、そのメッセージを体系的に解き明かしている。もしこの様に彼の視点で他の作品を読み解くことが仮に困難であるとしても、各作品において容易に見出される多くの聖書の引用がその作品にどのようなテーマを投げ掛けているかを知る上で、これらの引用箇所の分析は重要な意味をもつように思われる。今回は上述の *Hamlet* を例に取りながら、この点について考察してみたい。

方法としては、まず 1) ドラマの進行とともに時系列的に各表現を抽出し、聖書の該当箇所と対比する、2) これらの表現のみを再度並べ直すことによって、*Hamlet* における聖書のメッセージの全体的な流れを把握してみたいと思う。

英語版のテキストについては *Hamlet* (the Riverside Shakespeare)<sup>6)</sup>, the Holy Bible<sup>7)</sup>, また各々の日本語訳は *Hamlet* に関しては、拙訳をはさみつつ、小田島訳<sup>8)</sup>、松岡訳<sup>9)</sup> を、聖書に関しては旧約 1955 年訳、新約 1954 年訳<sup>10)</sup> を用いる。

## 2. Bible からの引用箇所もしくはキリスト教に言及と思われる箇所

### 2. 1. 鶏が鳴いた (Act 1, Scene 1)

1) Some say that ever' gainst that season comes / Wherein our Saviour's birth is celebrated, *This bird* of dawning singeth all night long. (*Ham.* 1.1.158-160)

これも聞いた話だが、救い主キリストの生誕を祝う季節が近づくと暁を告げるあの鳥(雄鶏)が夜を徹して鳴きつづけ... (小田島訳)

That this night, before *the cock crow*, thou shalt deny me thrice. (*Matt.* 26:34)

「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」(マタイ 26:34, マルコ 14:30, ルカ 22:34, ヨハネ 13:38)

Then began he to curse and to swear, saying, I know not the man. And immediately *the cock crew*. (*Matt.* 26:74)

「彼(ペテロ)は『その人(イエス)のことは何も知らない』といって激しく誓いはじめた。するとすぐ鶏が鳴いた。」(マタイ 26:74, 同マルコ 14:72, ルカ 22:60, ヨハネ 18:27)

*Hamlet* の幕開け、見張りの兵士マーセラスによって語られるこのセリフはどのような意味をもつのか。「鶏」をキーワードに聖書をみると、上述の新約の箇所のみである。これはいうまでもなく、自分の捕縛を予期したイエスが弟子ペテロの自分に対する裏切

り [罪] を告げる場面であり、これに対して *Hamlet* の冒頭では夜な夜な現れる亡霊の出現を言及する中で「鶏」が用いられているのである。“our Saviour’s birth”（「キリスト降誕を祝う」）とあるが、正体不明の亡霊の出現に恐れおののく兵士たちの口をとおして、祝福のメッセージを読者（観客）に伝えようとしているとは到底考えられない。J. D. Wilson もテキスト・ノートの中でマーセラスのこのような伝説については不明と述べ<sup>10)</sup>、また読み手も「鶏」で聖書に思い浮かぶのは上記の箇所のみであろう。であるならば、Shakespeare が亡霊の登場と聖書の「鶏」を結びつけた理由は、これから劇中において始まる様々な「裏切り」すなわち [罪] を予感させるオープニングの道具立てとしてではなかったか、ということである。ちなみに savior という単語はコンコーダンスでみ限り、Shakespeare の全作品中、ここで 1 回使用されているのみである。

## 2. 2. 姉を妃とし～自殺は罪 (Act 1, Scene 2)

1) Therefore our sometime sister, now our queen, / .../ Have we.../... and with dirge in marriage. (*Ham.* 1.2.8-12)

それゆえ予はかつての姉を今や妃とし、... (拙訳)

先王 Hamlet の弟 Claudius が、戴冠式の席で先王（自分の兄）の妃 Gertrude を自分の妻にしたことを宣言する場面であるが、Claudius は近親相姦ともいうべき不道德をなぜ公衆の面前で発表する必要があるのだろうか。

ルツ記の主人公ルツは普通の結婚生活に恵まれず、なお神の目的のために役割を担った女性である。ルツはエリメレクとナオミの長男マフロンと結婚したが死に別れ、裕福な「親戚」ボアズと結婚、やがてその子孫の一人になるのがダビデである。このように、後継ぎを確保する為、古代ユダヤにおいて亡夫の兄弟は寡婦と結婚して子をつくる、というのがレヴィラト婚である。

If brethren dwell together, and one of them die, and have no child, the wife of the dead shall not marry without unto a stranger: her husband’s brother shall go in unto her, and take her to him to wife, and perform the duty of an husband’s brother unto her.

(*Deuteronomy* 25:5)

兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで子のない時は、その死んだ者の妻は…その夫の兄弟が彼女の所にはいり、めとって妻とし、夫の兄弟としての道をつくさなければならない。(申命記 25.5)

ここにおける聖書の主題は「契約の民以外の人々にも及ぶ神の善意」<sup>12)</sup>とされるが、このレヴィラト婚のたとえを用いて、Claudius はかつての姉との結婚（不義）を公に正当化しようと試みているように思われる。だが観客はそのような彼の「神の意志は我が意思（またはその逆）」という「履き違えの」考え方に共感するだろうか。まして Gertrude には Hamlet という嫡子があるのだ。Shakespeare の狙いはまさしくそこにあったのかもしれない。

2) Fie, 'tis a fault to heaven,/ A fault against the dead...(Ham. 1.2.101-102)

天にそむき、死者にそむく罪（拙訳）

華やかな戴冠式と結婚式のかげで憂鬱に沈む Hamlet。その彼に叔父はこのような言葉でふさぐのをやめるようたしなめ、励ます。この「天にそむく罪」とは次の聖書の引用であろうか。

The heaven shall reveal his iniquity; and the earth shall rise up against him. (Job 20:27)

「天は彼の罪をあらわし、地は起こって彼を攻めるだろう」（ヨブ 20:27）

I will arise and go to my father, and I will say unto him, Father, I have sinned against heaven, and before thee. (Luke 15:18)

「父よ、わたしは天に対しても、あなたに向っても、罪を犯しました。」（ルカ 15:18）

さらに Claudius は次のように続ける。

3) From the first corse till he that died to-day,/ "This must be so."  
(Ham. 1.2.105-106)

人類の最初の死者から今日死んだ者にいたるまで「それが必然だ」と道理は説いてきた（松岡訳）

松岡訳の注<sup>13)</sup>にもあるように、“the first corse”<sup>14)</sup>とは兄カインに殺された弟アベルのことであろう。Claudius は自分が犯した〈兄殺し〉を意識してこのセリフを語っているか否かは、ここではわからない。実際、舞台上でそれを表現したとしても、ほんの一瞬なのでよほど注意しないと観客には伝わらないであろう。いやむしろ、ここでは何気なく意識せずに〈兄殺し〉を語った、という演出のほうが面白かろう。なぜなら Hamlet をたしなめようと引用したこの言葉によって、後の3幕3場において Claudius 自身が苦しめられることになるのだから。

And it came to pass, when they were in the field, that Cain rose up against Abel his brother, and slew him. (*Gen.* 4:8)

彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。

4) Or that the Everlasting had not fix'd/ His *canon* 'gainst [self-] slaughter!

(*Ham.* 1.2.131-132) せめて自殺を罪として禁じたもう神の掟がなければ。(小田島訳)

この *Hamlet* のセリフ中の His *canon* とは「きまり、法律」の意味であるが<sup>15)</sup>、Milward はこの箇所について、旧約聖書の〈宗教上の法、戒律すなわちモーセの十戒の「汝、殺すことなかれ」(*Exo.*20:13) を引用しているが、*Hamlet* がこの箇所で自問自答する「自殺を禁じる神の掟」はモーセの十戒では今ひとつ明確ではない。むしろ新約のパウロのことは「自害してはいけない」の方が説得力があるように思われる<sup>16)</sup>。

But Paul cried with a loud voice, saying, Do thyself no harm: (*Acts* 16:28)

「25 真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り… 26 ところが突然、大地震が起こって、獄の土台が揺れ動き、…みんなの者の鎖が解けてしまった。27 獄吏は…囚人たちが逃げ出したものと思い、つるぎを抜いて自殺しかけた。28 そこでパウロは『自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる』(使徒行伝 16:28)

いずれにしても Shakespeare は *Hamlet* をその信仰の深さゆえに自殺によって苦悩から逃れることを避け、その苦悩の中に生きることを自ら選ぶ人間として描いていることが、このセリフから想像できる。そして *Hamlet* はこれから、地上での苦悩の中に生きねばならない、という覚悟あるいは諦めにも似た気持ちを次のセリフで表しているように思われる。

5) Would I had met my dearest foe in heaven...(*Ham.* 1.2.182)

最も憎むべき<sup>17)</sup> 敵に天国で会っていたらよかったのに (拙訳)

### 2.3. 天国へのいばらの道 (Act 1, Scene 3)

1) *Oph.* Do not, as some ungracious pastors do,  
Show me the steep and *thorny way to heaven* ,  
Whiles, [like] a puffed and reckless libertine,  
Himself the primrose path of dalliance treads,...(*Ham.* 1.3.47-50)

罰当たりな神父様のように、  
私には天国へのけわしい茨の道を教えておいて、  
ご自身は身をもちくずした放蕩者のように

歓楽の花咲く道を歩んでご自身の教えを忘れてしまう (小田島訳)

旧約の創世記・箴言・ホセア書に用いられている「いばら」は「なまけ者」との関連で用いられ、なまけ者(すなわち神の言葉を聞かない者＝原罪を犯したアダムとイヴ)には(神の)罰、すなわち苦難が待ち受けることをたとえているのであろうか。マタイ(7:16-21)の「茨からぶどうを」は、この旧約を受け継ぎ、「主の教えを実行する」ならば「天国へは苦勞して行くもの」でもなければ「天国への道はつねに険しい」わけでもない、と言っているわけである。Opheliaの“ungracious pastors”は、小田島も松岡も「罰当たりな」と訳しているが、Schmidtによれば“impious, wicked”であり<sup>18)</sup>、当時、聖職者が必ずしも皆「敬虔で、信心深い」とは限らないことを揶揄したセリフであるかもしれない。拙訳なら「なまぐさな」とでもするところか。

Thorns also and thistles shall it bring forth to thee; and thou shalt eat the herb of the field; (*Genesis* 3:18)

「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、私が命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、…地はあなたのために、いばらとあざみを生じ、…」(創世記 3:18)

The way of the slothful man is as an hedge of thorns: but the way of the righteous is made plain. (*Proverbs* 15:19)

「なまけ者の道には、いばらがはえしげり、正しい者の道は平らかである。」(箴言 15:19)

Therefore, behold, I will hedge up thy way with thorns, and make a wall, that she shall not find her paths. (*Hosea* 2:6)

「それゆえ、わたしはいばらで彼女の道をふさぎ、かきをたてて、彼女にはその道がわからないようにする。彼女はその恋人たちのあとを慕って行く、しかし彼らに追いつくことはない。」(ホセア書 2:6)

Do me gather grapes of thorns, or figs of thistles?...

「茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があろうか。」(マタイ 7:16)

“the primrose path”について J. D. Wilson はマタイ伝のこの直前の部分を対応する箇所としてあげている<sup>19)</sup>。

Enter ye in at the strait gate: for wide is the gate, and broad is the way, that leadeth to destruction, and many there be which go in thereat: Because strait is the gate, and narrow is the way, which leadeth unto life, and few there be that find it. (*Matt.* 7:14-15)

「13 狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そしてそこからは行って行く者が多い。14 命にいたる門は狭く、その道は細い。そしてそれを見出す者が少ない。」

(マタイ 7:13-14)

## 2. 4. 裁きは天に委ね (Act 1, Scene 5)

1) But howsomever thou pursues this act,  
Taint not they mind, nor let thy soul contrive  
Against thy mother aught. Leave her to heaven,  
And to those thorns that in her bosom lodge  
To prick and sting her. (*Ham*. 1. 5. 84-88)

だが、いかなる手段を取ろうとも

心は汚すな、母には危害を加えるな。

母の裁きは天に委ね、

心に宿る呵責のとげに責め苛ませるのだ。(松岡訳)

このように父の亡霊に母を責めることを固く留められたにも関わらず、Hamlet は 3 幕 4 場で激しく母を罵る。そのため再度亡霊が現れるのである。「裁きは天に」これは後の 3 幕 3 場でも指摘することになるローマ人への手紙の中の戒めであろう。

Avenge not yourselves, but rather give place unto wrath: for it is written, Vengeance is mine; (*Romans* 12:19)

「主がいわれる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである」(ローマ 12:19)

## 2. 5. 神に似せて造られた人間 (Act 2, Scene 2)

1) *Ham*. What [a] piece of work is a man, how noble in reason, how infinite in faculties, in form and moving, how express and admirable in action, how like an angel in apprehension, how like a god! ... and yet to me what is this quintessence of dust? (*Ham*. 2.2.303-308)

人間とは何という傑作であろうか、理性は気高く、その能力も、姿形も動きも無限、情感は豊かにしてすばらしく、天使のごとき知覚、何と神に似ていることか ... だが私にとっては土から取り出されたこの肉体は一体何の意味が? (拙訳)

P. Milward はこの Hamlet のセリフについて次の聖書の箇所を対応させている。

What is a man, that thou art mindful of him? And the son of man, that thou visitest him? For thou hast made him a little lower than the angels, and hast crowned him with glory and honour. Thou madest him to have dominion over the works of thy hands: thou hast put all things under his feet: (*Psalms* 8:4-6)

「人は何物なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何物なので、これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神より低く造って、栄えと誉れとをこおむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。(詩篇 8:4-6)

「人は何物なので、あなたはこれを大きなものとし、これにみ心をとめ、…」(ヨブ記 7:17)

「人間が何物だから、これを御心に留められるのだろうか。人の子が何物だから、これをかえりみられるのだろうか。あなたは、しばらくの間、彼を御使たちより低い者となし、栄光とほまれとを冠として彼に与え、万物をその足の下に服従させて下さった。」(ヘブル人への手紙 2:6-8)

さらに Milward は、これらはすべて「神は自分のかたちにて人を創造された。」(創世記 1:27) に由来し、Hamlet の “how like a god!” もここに帰する、と指摘している。<sup>20)</sup> だが、Hamlet はこの直後に「神の似姿に作られた」人間も「ただの土くれにすぎない」とすぐに否定的態度に戻る。これはヨブ記 (7:1-6) の「わたしの肉はうじと土くれをまとい、… 望みをもたずに消え去る」という人間のはかなさを示唆しているように思われる。

## 2. 6. 罪人の母 (Act 3, Scene 1)

Get thee [to] a nunn'ry, why wouldst thou be a breeder of *sinners*? ... We are arrant knaves, believe none of us. (*Ham.* 3.1.120-129)

尼寺へ行け、なぜ罪人の母となりたがるのだ? われわれは皆、悪党だ、誰ひとりとして信じてはならぬ (拙訳)

日本語訳の「罪人の母」についてはキリスト教を意識しなければ「罪人」とは? とびんとこないかもしれない。しかし元の英語では “a breeder of sinners” と複数で表現され罪人一般を指す。すなわちアダムとイヴ以来、女性はみな罪人の母親というわけである。そしてそういう Hamlet 自身も “arrant knaves” (悪党 = 罪人) であることを意識しているのである。「われわれはみな根っからの悪党…人間など一人も信じてはならぬ。」これについて Milward は「義人はひとりもない」(ローマ 3:10) と対応させ、Hamlet がなぜそれほどまでに「罪を背負った人間」を意識するのかといえば、彼が留学していた Wittenberg 大学は「人間不信」をテーマとした、すなわちルターを指導者とする宗教改



革の中心地であり、そこから Hamlet は帰ってきた、という設定であるからだと指摘している<sup>21)</sup>。なんとすればヨーロッパ全土に吹き荒れた「罪の意識」が Shakespeare 自身をして Hamlet にそれを表現させざるをえない時代背景にあったのかもしれない。

## 2. 7. 神が代理人に造らせた人間とは (Act 3, Scene 2)

O, there be players that I have seen play—and heard others [praise], and that highly—not to speak it profanely, that, neither having th' accent of Christians nor the gait of Christian, pagan, nor man, have so strutted and bellow'd that I have thought some of Nature's journey-men had made men, (*Ham.* 3.2.28 - 35)

そう言えばおれが見た役者のなかには、大向こうに受け、大喝采を受けていながら、罰当たりなことを言うつもりもないが、だいたいキリスト教徒らしいものの言いかたもできず、動きにしたところでキリスト教徒でも異教徒でもない、人間らしさのかけらもない連中がいる。もったいぶって歩いたりわめいたりするだけで、あれでは神様が日雇いの職人に人間を造らせたのではないかと思ったぐらいだ... (小田島訳)

これは、さきほどの2幕2場で指摘された「神は自分のかたちに人を創造された。」(創世記 1:27) の裏返しともいうべき表現であるように思われる。もし神が自分に似せて精巧に人間を造らなかったならば、どのような人間がこの世に現れたのであろうか。しかしいつの時代にも「神様が日雇いの職人に造らせたのではないかと思ったぐらい」神の意志に沿わない生き方をする人間はいるもので、当時も今もこのセリフを聞きながら苦笑いする観客も少なくないはずである。Shakespeare は、前の1幕3場の Ophelia に語らせたのと同様、そのような愚かな人間は「神の御旨を行わぬ」者として、マタイ伝の続きで次のようにたとえている。

And every one that heareth these sayings of mine, and doeth them not, shall be likned unto a foolish man, which built his house upon the sand: And the rain descended, and the floods came, and the winds blew, and beat upon that house; and it fell: and great was the fall of it. (*Matt.* 7:26-27)

「26 また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。27 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ 7:26-28)

## 2. 8. 兄弟殺しの罪 (Act 3, Scene 3)

1) O, my offense is rank, it smells to heaven,

It hath the primal eldest curse upon't, / A brother's murth'ring. (*Ham.* 3.3.36-38)

おお、この罪の悪臭、天にも達しよう。人類最初の罪、兄弟殺しを犯したこの身

当然ながら、このセリフからはさきほどの1幕2場でも指摘した創世記の「兄カインによる、弟アベル殺し」が想像される。

And Cain talked with Abel his brother: and it came to pass, when they were in the field, that Cain rose up against Abel his brother, and slew him.... And Cain said unto the LORD, My punishment is greater than I can bear. (*Genesis* 4:8-13)

「8 カインは弟アベルに言った、『さあ、野原へ行こう』。彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。9 主はカインに言われた、『弟アベルは、どこにいますか。』カインは答えた、『知りません。私が弟の番人でしょうか。』10 主は言われた、『あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の音が土の中からわたしに叫んでいます。』…13 カインは主に言った、『わたしの罰は重くて負いきれません。14 あなたは、きょう、わたしを地のおもてから追放されました。』(創世記 4:8-14)

*Hamlet* においては旧約の兄と弟の関係が逆転しているが、Claudius はなぜ兄の Hamlet 王を殺さねばならなかったのか。これは本論の目的外の問題であるので、これ以上深くは追求しないが、創世記のこの記述の前(4章1節～7節:「神はカインの貢物には目をくれず、弟アベルの羊を喜んだ。」)を読むと、様々なことが想像されて興味深い。

兄殺しの罪を悔いて、Hamlet が背後に迫るのも気付かず一心不乱に祈る Claudius。だが、Hamlet はその叔父をみて一度はこれを復讐する千載一隅の機会とみなながらも、これをためらう。何ゆえか。

2) *Ham.* Why, this is [hire and salary], not revenge.

'A took my father grossly, full of bread,

With all his crimes broad blown, as flush as May,

And how his audit stands who knows save heaven?

But in our circumstance and course of thought

'Tis heavy with him. And am I then revenged,

To take him in the purging of his soul,

When he is fit and season'd for his passage? (*Ham.* 3.3.79-86)

これではやとわれ仕事だ、復讐にはならぬ。

父上は、この世の欲にまみれ、あらゆる罪が

五月の花と咲き誇るさなかに、やつの手にかかって

非業の死をとげられた。神の裁きがいかなるものか、

われわれには知るよしもないが、どう考えてみても

軽いはずはない。それなのに、どうだ、  
復讐したといえるか、祈りに魂の汚れを清め、  
死出の旅路の用意のできているやつを殺して？（小田島訳）

エレミア書は次のように語る。

Why trimmest thou thy way to seek love? therefore hast thou also taught the wicked ones thy ways. Also in thy skirts is found the blood of the souls of the poor innocents: I have not found it by secret search, but upon all these. Yet thou sayest, Because I am innocent, surely his anger shall turn from me. Behold, I will plead with thee, because thou sayest, I have not sinned. (*Jeremiah* 2:33-35)

「33 あなたは恋人を尋ねて、いかにも巧みにその方に足を向ける。それゆえ悪い女さえ、あなたの道を学んだ。34 また、あなたの着物のすそには罪のない貧しい人の命の血がついている。あなたは彼らが押し入るのを見たのではない。しかも、すべてこれらのことにもかかわらず、35 あなたは言う、『わたしは罪がない。彼の怒りは、決してわたしに臨むことがない』と。あなたが『わたしは罪を犯さなかった』ということによって、わたしはあなたをさばく。」（エレミア書 2:33-35）

そして新約の「ローマ人への手紙」ではこう語られる。

Dearly beloved, avenge not yourselves, but rather give place unto wrath: for it is written, Vengeance is mine; I will repay, (*1 Romans* 12:19)

「愛する者たちよ。自分で復讐しないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら『主がいわれる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである」（ローマ 1, 12:19）

このように、祈る Claudius を見て Hamlet は「裁くは神にあり」と悟り、その場を立ち去るのである。参考までに、河合は Hamlet の 5 幕 2 場の ‘sparrow speech’ (*Ham.* 5.2.219-224) とローマ書のこの箇所とを対応させている<sup>29)</sup>。

## 2. 9. 姦淫の戒めと罪の許し (Act 3, Scene 4)

A bloody deed! almost as bad, good mother,  
As kill a king, and marry with his brother. (*Ham.* 3.4.28-29)

むごいこと！ なるほどそのとおりだ、母上、  
王を殺して、その弟と結婚するにも劣らぬひどさだ。

以下、不義を犯した母 Gertrude を激しく責めたてる罵りのことばが Hamlet のセリフからあふれ出る。それらの言葉から連想されるのはエレミアによる「姦淫の戒め」である。

「1 もし人がその妻を離婚し、女が彼のもとを去って、他人の妻となるなら、その人はふたたび彼女に帰るであろうか。その地は大いに汚れないであろうか。あなたは多くの恋人と姦淫を行った。しかもわたしに帰ろうというのか」と主は言われる。

「2 目をあげてもろもろの裸の山を見よ、姦淫を行わなかった所がどこにあるか。…あなたは道のかたわらに座して恋人を待った。あなたは姦淫の悪事をもって、この地を汚した。3 それゆえ雨はとどめられ、春の雨は降らなかった。しかもあなたには遊女の額があり、少しも恥じようとしない。」  
(エレミア 3:1-10)

しかし、Hamlet の母への怒りが頂点に達しようというその瞬間、父の亡霊が再度出現する。そして「母親の心の苦しみを取り除き、やさしくするよう」Hamlet に呼びかける。

2) But look, amazement on thy mother sits,  
O, step between her and her fighting soul.  
Conceit in weakest bodies strongest works,  
Speak to her, Hamlet. (*Ham.* 3.4.112-115)

だが見ろ、そなたの母はあのように恐れおののいておる、  
あれの苦しみを取りのぞいてやるがいい、  
からだの弱いものほど心の思いは強く働く、  
ことばをかけてやれ、ハムレット。(小田島訳)

この亡霊のセリフにわれわれは再度「あなた方の中に罪を犯さなかった者がいるか」(ローマ 3:10) という「罪の意識」を喚起させる言葉を思い出すのではなかろうか。父の亡霊のこのセリフはまた同時に、「罪」に対する「救い」と「許し」の意味をも含んでいるように思われる。さらに“Conceit in *weakest* bodies *strongest* works” という対比表現は例えば、

A little one shall become a thousand, and a small one a strong nation: (*Isaiah* 60:22)

「その最も小さい者は氏族となり、その最も弱い者は強い国となる。」(イザヤ 60:22)

Because the foolishness of God is wiser than men; and the *weakness* of God is *stronger* than men. (*I Corinthians* 1:25)

「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」(コリント 1:25)

...there hath not risen a greater than John the Baptist: notwithstanding he that is *least* in the kingdom of heaven is *greater* than he. (*Matt.* 11:11)

「女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。しかし天国で最も小さい者も、彼よりは大きい。」(マタイ 11:11)

などの聖書のいいまわしに遡ることが出来るように思われる。

## 2. 10. 夫婦は一心同体 (Act 4, Scene 3)

*Ham.* Farewell, dear mother.

*King.* Thy loving father, Hamlet.

*Ham.* My mother: father and mother is man and wife, man and wife is one flesh— so, my mother. (*Ham.* 4.3.49-52)

ハ：行ってまいります、母上。

王：おまえの父だぞ、ハムレット。

ハ：母上です。父と母は夫と妻、夫と妻は一心同体、したがって母上。(小田島訳)

叔父 Claudius と間違えて Polonius を殺した Hamlet はついに Claudius によって英国への追放を命じられる。その際かわされるこのセリフはこれまでに度々指摘されているように、Shakespeare が創世記およびマタイによる福音書の次の箇所を引用したのは明らかであろう。

Therefore shall a man leave his father and his mother, and shall cleave unto his wife: and they shall be one flesh. (*Genesis* 2:24)

「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。」(創世記 2:24)

For this cause shall a man leave father and mother, and shall cleave to his wife: and they twain shall be one flesh? (*Matt.* 19:5)

「それゆえに人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである」(マタイ 19:5)

しかし Hamlet のセリフの中に刷りこまれたこれらの引用は、一度 Claudius へ投げかけられ、リバウンドしてわれわれ観客の耳に入ってくる。すなわち、Hamlet は叔父に対して「そうなるべきであるにもかかわらず、あなたは今どうなのだ？」と問いかける形で、この聖書のメッセージを観客に聞かせている。

## 2. 11. 神の摂理 (Act 5, Scene 2)

舞台も大詰めを迎え、Hamlet はいよいよ叔父に対する復讐のときを迎えることになる。もっとも彼自身はそのことを自覚しているわけではなく、Claudius と Laertes の仕組んだ決闘の申込みを承諾するだけである。胸騒ぎを感じ、申し出を断るよう説得する Horatio

に対して、Hamletは覚悟の胸の内を次のように語るのである。

There is special providence in the fall of a sparrow. If it be [now], 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it [will] come—the readiness is all. Since no man, of aught he leaves, knows what is't to leave betimes, let be.

(*Ham.* 5.2.219-224)

雀一羽落ちるのも神の摂理。来るべきものはいま来ればあとには来ない、あとで来ないならばいま来るだろう、いまでもなくても必ず来るものは来るのだ。なによりも覚悟が肝要。人間、するべきいのちについてなにがわかっている？とすれば、早くすることになったとしても、それがどうだというのか？かまうことはない。(小田島訳)

この冒頭の“special providence in the fall of a sparrow”はDover Wilsonも指摘するように<sup>23)</sup>、マタイ 10:29 から引用されていると考えてよいだろう。

Are not two sparrows sold for a farthing? And one of them shall not fall on the ground without your Father. (*Matt.* 10:29)

「29 二羽のすずめは一アサリオンで売られているではないか。しかもあなたがたの父の許しがないければ、その一羽も地に落ちることはない。」

事態がここに及んで、じたばたしても仕方がない、という彼のセリフは、しかし決してネガティブな諦めの心境から出たものではなく、これから自らにふりかかる運命すべてを受け入れよう、すべてを「神の裁き」に託そうというポジティブな覚悟である。そのことはこのセリフの最後の“let be”（なるようになれ）からも明かである。母の再婚（＝不義）に対する憤りと失望、それゆえに死を望みながらも（1幕）、その死に対する恐れと不安（“To be, or not to be” 3幕・第4独白）に苛まれつつ、英国追放の途中、運良くそれを逃れ、最後にHamletが辿りついた境地がこの「全ては神の意志のままに」であった。そして決闘の最中に母を失い、Laertesを失い、最後は叔父に対する復讐を遂げつつも、Hamlet自身が命を奪われる。Horatioは、これらはすべて“accidental judgments”（「偶然の裁き」）によるもの、とFortinbrasに語る。（*Ham.* 5.2.382）しかし、この「偶然」は人間にとってはそうかもしれないが、Hamletが決闘の直前に語ったように「神の摂理」による「神の意図された裁き」であることをShakespeareは伝えようとしているように思われる。

## 3. まとめ

これまでに *Hamlet* のセリフに引用された（と思われる）聖書の箇所を、図式で再度表すならば次のようである。

図 1 からわかることは、今回取り上げた *Hamlet* の全 16 箇所に対応する聖書の約半分が旧約の創世記と新約のマタイ伝から引用されているということである。（創世記 6, マタイ 7）そしてそれらの間に他の旧約・新約の申命記、ヨブ記、詩篇、ルカ伝、ローマ書などの各個所がサンドイッチ状にはさまれて用いられている。したがって Marx の披露したようなひとつの聖書とひとつの Shakespeare 作品の対応という関係を *Hamlet* に見

図 1

1	Act 1	Scene 1	鶏が鳴く ... (罪の予感)	⇔	マタイ 26:34, マルコ 14:30, ルカ 22:34, ヨハネ 13:38
2	Act 1	Scene 2	姉を妃とし ... (不義の正当化)	⇔	申命記 25:5
3	Act 1	Scene 2	天にそむく罪	⇔	ヨブ 20:27 / ルカ 15:18
4	Act 1	Scene 2	人類最初の死者	⇔	創世記 4:8
5	Act 1	Scene 2	自殺は罪	⇔	出エジプト 20:13 / 使徒 16:28
6	Act 1	Scene 3	いばらの道	⇔	創世記 3:18, 箴言 15:19 / マタイ 7:16-21
7	Act 1	Scene 5	裁きは天に	⇔	ローマ 12:19, マタイ 7:1
8	Act 2	Scene 2	神に似せられた人	⇔	創世記 1:27, ヨブ 7:17, 詩篇 8:4-7 / ヘブル 2:6-8
9	Act 3	Scene 1	罪人の母	⇔	ローマ 3:10
10	Act 3	Scene 2	神の代理人が造った人	⇔	創世記 1:27 / マタイ 7:26-28
11	Act 3	Scene 3	兄弟殺しの罪	⇔	創世記 4:8-14
12	Act 3	Scene 3	復讐は神に	⇔	エレミヤ 2:33-35 / ローマ 12:19
13	Act 3	Scene 4	姦淫の戒め	⇔	エレミヤ 3:1-10
14	Act 3	Scene 4	罪の許し	⇔	マタイ 7:1, ローマ 3:10 他
15	Act 4	Scene 3	夫婦は一心同体	⇔	創世記 2:24 / マタイ 19:5
16	Act 5	Scene 2	神の摂理 (神の裁き)	⇔	マタイ 10:29

ることは困難なように思われる。

にもかかわらず、Shakespeare は、このような聖書の引用やキリスト教の教えを示唆するような表現を、はたしてどのような目的で、セリフの中に埋め込んだのであろうか。これは Shakespeare 以前の、民衆にキリスト教信仰を意識させようとした教訓的内容の中世宗教劇とは明かにその提示の仕方が異なる。すなわち、一見観客にそれとは意識させないように、さりげなくテーマをちりばめておき、実はあとからじわりとその深層の意味を見る者の中に問いかける作用があるように思われるのである。それは表現を変えるならば、聖書のことばが、語り手である役者から観客へストレートに伝えられるのではなく、あたかも「役者が時代を写す鏡」(‘a mirror to nature’)<sup>24)</sup>であるのと同様、役者によって語られたこれらの言葉は一度、ドラマの登場人物たちの中で反芻され、それが「鏡にはねかえった」かのようにして観客の耳に聞こえてくる（あるいは読者の脳裏に伝わってくる）といった具合である。もちろん引用の多くは登場人物たちの独白においてより多く見られるものであるが。

ロンドンのバンクサイドにあるサザーク教会 (Southwark Cathedral) には、Shakespeare が当時この教会の信者であったことを記念して作られた彼の横臥像と ‘Shakespeare Window’ と呼ばれるステンドグラスが今も見られる。Shakespeare が熱心なキリスト教徒であったか否かは別として、彼自身が聖書に強い影響を受けていたということ、そして Shakespeare が単に彼自身の表現力を補う目的で聖書を引用したと推論する向きはあるにしても、彼の作品中に「キリスト教世界」というものが色濃く存在することは否定できない事実であろう。

そして *Hamlet* において脈々と流れる聖書のメッセージは、本文でも述べてきたように「罪の意識」と「裁き」、そして「救い」といえよう。たしかに Shakespeare の生きた 400 年前と現代とでは、時代の様相が驚くほど異なり、Shakespeare がそのセリフの中で意図した観客へのメッセージは、現代の観客へ伝わるものとはかなり違ったものであっただろう。しかし、世の中が当時とは比べ様もなく複雑化したにも関わらず、不思議とわれわれ現代の読者・観客の心の中に沸き起こる「殺人や不義、復讐」に対する「罪悪感」と「裁き」の問題、それらに対する「救い」の願望は、*Hamlet* をとおして 400 年前と少しも変わらないように思われる。そしてそれは普遍的価値をもつ聖書のメッセージに支えられるゆえ、と結論付けるのは早計であろうか。原語どおしの比較に際して、今回聖書は欽定訳の現代語版である the Holy Bible を用いたが、Shakespeare が愛読したとされる Geneva 版との比較は次なる課題としたい。



## Notes

- 1) Steven Marx の著書 *Shakespeare and the Bible* における分析法をさす。
- 2) *ibid.*
- 3) *ibid.* Typology (予表論) とは、「複数のテキスト間の類似点と対応関係に注目する方法で、聖書においては例えば創世記の「イサクの生贄」が新約における「イエスの犠牲」を予期したものであり、Shakespeare と聖書の予表論的關係のひとつが「出エジプト記」におけるファラオの軍隊に対するイスラエル軍の勝利と、*Henry V* におけるアジンコート の戦いにおける仏軍に対する英軍の勝利との間の関係に見られる、としている。(S. Marx, pp.39-40, 山形 pp.39-41 参照)
- 4) *ibid.*
- 5) *ibid.* 注 (3) 参照。S. Marx, pp.39-40. Typology, midrash の日本語訳は山形を参照
- 6) The Riverside Shakespeare
- 7) The Holy Bible
- 8) 小田島雄志訳 (1983 年白水社) 参照
- 9) 松岡和子訳 (1996 年筑摩書房) 参照
- 10) 旧約 1955 年訳・新約 1954 年訳 (1979 年日本聖書協会編)
- 11) J. D. Wilson (p.148) 参照
- 12) ボウカー (p.111) 参照
- 13) 松岡訳 p.28「カインに殺された兄アベル」とあるが弟アベルの誤りか。
- 14) *ibid.* corse =dead body, <Schmidt による。最初の死者、すなわちアベル
- 15) *canon* :1. A rule, law or decree of the Church (OED), Schmidt も同様。
- 16) 日本基督教団・永井二三男牧師によると、聖書で直接「自殺を禁じる」表現は新約のこの箇所しか見当たらないということである。
- 17) 'dearest' は 'most intensely hated' の意味。Riverside 版の注参照。
- 18) "ungracious" は Schmidt によれば "impious, wicked" の意味。
- 19) J. D. Wilson, p.155 参照。
- 20) P. Milward, pp.142-143 参照。
- 21) *ibid.*., pp.144-145 参照。
- 22) 河合 p.224 参照。
- 23) Dover Wilson, p.249 参照。
- 24) Hamlet, Act 3 Scene 2, ll.22 " 'twere the mirror up to nature"

## 参考文献

- Steven Marx, *Shakespeare and the Bible* (Oxford University Press, 2000)  
*The Holy Bible* (The Gideon's International, 1961)  
*The Riverside Shakespeare* (Houghton Mifflin, Boston, 1974)  
*The New Shakespeare Hamlet* edit. by John Dover Wilson (Cambridge University Press, 1936)  
Marvin Spevack, *The Harvard Concordance to Shakespeare* (Georg Olms Verlag Hildesheim, 1973)  
Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*, 2 vols. (Dover Publications, New York, 1971)  
S・マークス『シェイクスピアと聖書』山形和美訳 (日本基督教団出版局 2001 年)  
ピーター・ミルワード『シェイクスピアの人生観』安西徹雄訳 (新潮選書, 1985 年)

河合祥一郎「謎解き『ハムレット』一名作のあかし」(三陸書房, 2000 年)

『ハムレット』小田島雄志訳(白水社 U ブックス, 1983 年)

『ハムレット』松岡和子訳(ちくま文庫, 1996 年)

『口語訳聖書コンコルダンス』(新教出版社, 1978 年)

ジョン・ボウカー『聖書百科全書』荒井 献・池田 裕・井谷嘉男監訳(三省堂, 1998 年)

『聖書』(日本聖書協会, 1955 年旧約・1954 年新約)

\* この拙論は平成 13 年度学習院女子大学特別研究費による研究成果の一部であることを付記する。

(本学助教授)